

ジャコウアゲハのジャコウは香水の麝香で、実際このチョウのみを手にしてにおいがかぐといひ香りがします。昔、中国でジャコウジカを殺して香水を作っていた話とか、オス、メスともに麝香の香を放つというジャコウネコも有名です。ジャコウアゲハについては深見浩氏による京都大学化学生態研究室での研究があって、食草であるウマノスズクサからの抽出液をしみこませた紙に♀が産卵するという実験を発展させ、食草中に含まれるアリストロキア酸とセコイトールという二つの物質が混在するときのみ、それを感知して産卵することをつきとめています。実際、♀の前肢には多数の針のような毛があって、ウマノスズクサの葉っぱの表面に傷をつけて成分を確認してから産卵することが分かっています。ジャコウの香は、ウマノスズクサに含まれる成分を幼虫が体内に取り込んで、その成育過程でつくりあげられると考えられています。



ところでアリストロキア酸というのは人間にも有害な毒物であって、ジャコウアゲハはこの毒物を体内にもつことで鳥からの攻撃を回避していることも分かり、さらには、♀は産卵後にこの



毒を含むクリームを卵に塗布して外敵から守るという知恵までもっているというから驚きです。有名なフグは、海洋細菌が生

産するテトロドトキシンという青酸カリの 500 倍の強さがある猛毒を食物連鎖で体内に蓄積し、ストレスを与えると体表から毒成分を放出することが分かっています、大型魚などの外敵にはこの毒で対処していると推定されていますが、多くの魚類のなかでフグだけが毒を蓄積できる理由は謎のままです。自らはなぜ体内でその毒にやられないのかについて、フグは毒が作用する神経系構造が他の生物とは違って毒が入り込めないという説が有力のようですが、ジャコウアゲハについてはまったく分かっていません。

ジャコウアゲハは食草のウマノスズクサの分布と一致して、東北では能代市、二戸市、宮古市あたりが北限で、南は南西諸島全域にまで定着しています。♂翅表は黒いビロード状の光沢があり、♀は暗灰色で一見して区別がつけます。蛹で越冬しますが、オウムの顔に似た様相をもつユニークな形の蛹です。



西畑在住の 2000 年頃、佐用町から庭に移植しておいたウマノスズクサにどこから飛来したのジャコウアゲハ♀が産卵したことがあります。2014 年になって数キロ離れた加古川に近い高砂市内の土手にウマノスズクサ群生をみつけ、そこでの飛翔個体も確認できて納得しました。2008 年に迷チョウのクロマダラソテツジミが神戸市方面から加古川市立志方中学校のソテツ新芽の存在を感知して飛来し、次世代が発生したことなど、母チョウの食草を察知する力はまさにチョウ能力です。